

〈研究展望〉

スコットランド啓蒙研究の最近の動向

田中 秀夫・渡辺 恵一

要旨 本稿は主に2006年から2015年までのスコットランド啓蒙研究のサーヴェイである。前半は海外の研究を展望し、文献リストを作成した。後半は渡辺恵一氏による日本語文献のリストである（渡辺氏は採録を1980年代からに拡大している）。この10年ほどの海外のスコットランド啓蒙研究は非常に盛んで、注目すべき研究が目白押しである。まだまだ収穫期と言えるであろう。その一部については紹介した。我が国の研究も盛んではあるが、スミス研究などには後継者不足といった問題も出てきている。

キーワード スコットランド啓蒙, 合邦, 宗教, ハイランド, ジャコバイト, 女性, 独立問題, 離散, ヒューム, スミス, ファーガスン

A 海外の研究—2006年から2014年—

「スコットランド啓蒙」という概念は、いまだ一般に広く知られているとは思えないが、しかし研究者のあいだではよく知られるようになってきていると思われる。カントやフィヒテ、メンデルスゾーンなどを代表とするドイツ啓蒙、モンテスキューやヴォルテール、あるいは百科全書派やルソーを生み出したフランス啓蒙だけではなく、ヒューム、スミスを頂点にもつスコットランド啓蒙は、それをロイ・ポーターのように「大ブリテン啓蒙」の一環として理解する¹⁾のも一理あるが、メジャーな啓蒙として十分な資格がある。

スコットランド啓蒙の概念が使われ出したのは1970年前後からであるから、今では50年ほどの歴史があることになる。この間に研究は格段に進んだ。いくつかの記念碑的研究が生まれ、歴大な研究蓄積が築かれた。ジョージ・デイヴィー、ダンカン・フォーブズ、ロナルド・ミック、アレックス・マクフィー、アンドルー・スキナーなどが先駆的な仕事をした。水田洋氏の名もここに挙げておくべきであろう。

そうしたなかで最も影響力があったのは、おそらくまだ若かったイシュトファン・ホントとマイケル・イグナティエフ編の『富と徳—スコットランド啓蒙における経済学の形成』（ケンブリッジ大学出版会、1983年）²⁾であったかもしれない。これは論文集であるが、ケンブリッジを拠点に遂行された国際的な研究プロジェクトの成果として水準の高いものであった。それにはジョン・ロバートスンやデイヴィッド・リーバーマンなどの当時の若手だけではなく、ドナルド・ウィンチやジェームズ・ムーア、ニコラス・フィリップスンなどの中堅とともに、フランコ・ヴェントゥーリ、ジョン・ポーコックなどの巨匠も参加した。高名な経済史家のT・C・スマウトも参加している。

その後、スコットランド啓蒙研究は多くの研究者の参入するジャンルとなり、継続的に優れた多数の研究成果を生み出してきた。1991年には水田洋教授が中心となって、アダム・スミス国際シンポジウムが名古屋で開かれた。これは日本の学会として画期的だった。その成果はHiroshi Mizuta and Chuhei Sugiyama eds., *Adam Smith: International Perspectives*, Macmillan, 1992として出版された。自身の研究と近代自然法思想シリーズの出版に尽力しているクヌート・ホーコンセン (Knud Haakonssen) の名前も逸するわけにはいかないだろう。こうして研究水準が上昇し、スコットランド啓蒙の全貌と特質が今ではかなり明らかにされていると言えるかもしれない。

2005年にはジョン・ロバートスン John Robertson のポーコック批判『啓蒙の主張—スコットランドとナポリ』（*The Case for the Enlightenment: Scotland and Naples, 1680-1760*, Cambridge U.P.）, 2006年にリチャード・シャー Richard Sher の画期的な大著『スコットランド啓蒙と書物』*The Enlightenment and the Book* (Chicago U.P.) とが出版され、一つのピークに達したかの観があった。しかし、その後も研究の勢いは止まらず、成果は目白押しである。ある種、ネーミア史学的なエマソンの大学を中心とする啓蒙知識人の網羅的な調査は出色であり、彼の研究は開明為政者で啓蒙思想家の庇護者として高名な第3代アーガイル公爵、アイレイの研究に到達している³⁾。

私は2005年頃までの関係書物についてはこれまでにいくらかフォローしてきているが、その後はほとんどフォローできていない。したがって、今回の展望を行なうに当たって、その後10年間の主要な著作を対象にしようと考えてリストを作ってみた。自分でストックしてきたものは明らかに系統的ではなく、それを補うのにまずはECSSS (Eighteenth-Century Scottish Studies Society) のニューズレターを参考にした。もちろん、網羅的に拾ったわけではない。ロバート・バーンズ (Robert Burns) などの文学系と純哲系および自然科学系の著作の多くは割愛した。それは専攻上の制約による。トマス・リード関係もほとんど割愛したが、それは別の取り扱いが適切と考えたからである。

リスト作成のきっかけは社会思想史学会で行なったセッションにある。2014年10月の大会で「啓蒙の多様性と多元性」を主題に研究展望を行なおうと思い立って、研究仲間に声をかけ、その結果、フランス啓蒙について米田昇平氏、イングランド啓蒙について林直樹氏、そしてスコッ

トランド啓蒙については、自身が報告を行なうことに決まった。そしてコメンテーターをそれぞれ順に、喜多見洋氏、野原慎司氏、渡辺恵一氏にお願いすることになった。

そこで、渡辺氏にスコットランド啓蒙関係の文献リスト (Bibliography) を送り、抜けているものを補足していただいた。ポーコックの *Barbarism and Religion*, vol.5 (Cambridge U.P., 2010)⁴⁾ にヒュームは登場するが、宗教が主題でスコットランド啓蒙論はない。こうしたものは、いかに重要な研究であるとしても、リストから省いた。リストは後に掲げる。

読みえた文献は、拾い読みを含めても多くはない。したがって、十分な見極めができてはいないのだが、暫定的に、敢えて言うとするれば、全般的な印象としては以下の通りである。

- (1) 合邦と独立の問題が一大関心となったことは一目瞭然であろう。2007年は合邦300年であったが、各地でプロジェクトが企画された。水田洋教授、中澤信彦氏などとともに、私もエディンバラでの合邦300年の国際シンポジウム (ECSSS 主催、当時の会長はニコラス・フィリップスン) に参加して、ミラー研究のペーパーを読んだが、シンポジウムでの独立支持派のプレゼンスに圧倒されたという記憶がある。そこで初めてシャー、ムーア、メローレなどの面識を得たし、またゲスト講演者として招待されていたリング・コリーにも会った。そうした研究集会の結果、2007-2008年には1707年の合邦に関する研究成果が集中的に出ている。なかでも当時と今の Unionist と Nationalist の論争に注目が集まったが、それは独立を主張する NPS (スコットランド国民党) が議会で多数派を占め、独立の賛否を問う2014年の国民投票に繋がっていくという直近の動向に関係しているであろう [II*1-1~9]。独立支持派は最後に盛り上がったが、得票は最終的には45%程度で、独立はならなかった。
- (2) 帝国のなかでのスコットランドを問題にする研究が目立っている。それは近年際立っている帝国史研究、帝国論の隆盛の一環とみることができる。ネグリ=ハートの帝国論は関心を集めた。なぜ帝国史研究が盛んなのかは、EUの拡大やますます進展するグローバリゼーションが過去の参照を求め、帝国史研究の再検討を刺激していることが一因であると思われる。国民国家か、帝国か、国家連合か。世界共和国が展望できないまま国際化とグローバル化がますます進展する世界の現状では、帝國的現象をより深く知ることがアクチュアリティを持ちうるであろう。こうして帝国官僚、国策会社東インド会社の官吏=社員、アメリカ建国への貢献、お雇い外国人等、様々なトピックが取り上げられている [I-18, II*1-2, II*2-1,7, II*3-4]。別に挙げるがディアスポラ (離散) も帝国問題に重なっている部分がある。Susan Manning and Francis D. Cogliano eds., *The Atlantic Enlightenment*, Ashgate, 2008のような「大西洋啓蒙」という問題設定も登場 (再登場) した (本書では Hume, Witherspoon, Smith その他を取り上げている)。しかし、London 在住の Scots を Diaspora として語るのは語義の不当拡大ではないのだろうか [I-10]。
- (3) 啓蒙と宗教の関係も関心を集めている。なぜ宗教なのか。世俗化だけが啓蒙と関係したのではない。聖職者も啓蒙に関係していた。スコットランドの長老派には啓蒙の穏健派に対して反啓蒙の正統派、さらには福音主義的な傾向もあった。しかし啓蒙の本流は、それを

スピノザ以来の急進的啓蒙に求めるイスラエルの研究にもかかわらず、スコットランド啓蒙が穏健派啓蒙だったとすれば、イングランド啓蒙は保守的啓蒙であった [I-2, 6, 17, 26]。もちろん、スコットランドにもイングランドにももとより少数派の急進派がいたことは確かであるが、大きな勢力にならなかった。

- (4) またスコットランド啓蒙と女性との関係、女性知識人、啓蒙における女性の役割についても研究が盛んになってきた [I-19, 36, 39 (Chap. 6), 40]
- (5) ジャコバイト研究は持続的な研究主題であるが [II-*2-1~7]、ジャコバイトと関係の深いハイランドへの関心もいっそう深まってきた [I-7, 34, II-*3-1~4]。グローバル化が伝統とローカルへの関心を強めるという側面もあるだろう。
- (6) 離散 Diaspora も目立ったトピックとなってきた [II-*4-8, 12, 15]。離散にはネガティブな側面だけではなくポジティブな側面もある。アメリカへの移民も Diaspora ではある。日本では北政巳の研究がある [B: 1998 ; 2010]。
- (7) シャーが代表するように、出版と読者の研究も盛んである。[I-11, 19, 23, 24]。
- (8) スミス研究とヒューム研究が突出して多いのは、最近の持続的な傾向である。スペンサーのヒューム研究 [III-18その他] は注目に値するし、ヒュームでは『イングランド史』が研究の焦点になり始めている [III-15, 18]。
- (9) スコットランド啓蒙と共和主義の関係はさほど深化が見られないのか [I-21, Chap.6]。
- (10) 経済思想史研究は持続的 [I-1, 31, III-4, 11, IV-9, 11, 12, 13, 20, 24など]。スコットランドの中心にあるのは経済学であるという認識はジョン・ロバートスンのものであったが、クリストファー・ベリー [I-31] の見解も近い。経済学抜きスコットランド啓蒙研究は多様に可能であるが、中核部分を欠くことになるだろう。
- (11) 個別研究に注目すべきものがある。John Erskine 研究 [I-17]、Johnstones 研究 [I-18]、John Witherspoon 研究 [I-28]、Buccleuch 研究 [I-38] などである。アダム・スミスが関係したバックルー公爵についてのボニマンの研究は、いち早くフィリップスンが『スミス伝』 [IV-16] (*Adam Smith: An Enlightened Life*, 2010) で利用しているが、スミス研究の盛んな我が国の研究者にとっては待望の書であると思われる。
- (12) 個人として際だって活躍しているのは Broadie [I-9, 21, VI-2]、Emerson [I-5, 32, III-7]、Devine [II-*1-7, II-*4-8, 9, 10, 11] あたりか。

このように展望すると、スコットランド啓蒙自体が、非常に複雑な社会現象という側面も持っていることが浮かび上がってくる。それは一家族に焦点を当てても言えることで、ロスチャイルドのジョンストン家の研究 [I-18, Emma Rothchild, *The Inner Life of Empires: An Eighteenth-Century History*, Princeton U.P, 2011] は兄弟姉妹の人生の多様な顛末を描き出しており、きわめて興味深い。それを少し紹介しておこう。本書はスコットランドの名門、ジョンストン家 Johnstones の4人の姉妹、7人の兄弟の伝記である。ロスチャイルドの説明にしたがって、生

まれた順にその生涯の特徴を簡単に記そう。

Barbara (Johnstone) Kinnaird, 1723-65: ジャコバイトの Charles Kinnaird と結婚。

Margaret (Johnstone) Ogilvy, 1724-57: ジャコバイトとなる。逮捕され、エディンバラ城から脱獄、フランスに亡命。娘のマーガレットはジャマイカのジャコバイト John Wedderburn と結婚、ウェダバーンはマンズフィールド卿が主催して解放を宣告した有名な裁判として知られる黒人奴隷 Joseph Knight の所有者であったが、判決によってナイトは1774年にパースで解放された。

James Johnstone, 1726-94: スコットランドの名士、ボズウェルの父の推挙でライデンへ、ブリテン軍の兵士となる、老年になったときに議員となり、奴隷制に反対した。

Alexander Johnstone, 1727-83: 政府軍の兵士、カナダとニューヨークに従軍、西インドのグレナダの要塞構築、砂糖プランテーションを購入、178人の黒人と混血の奴隷を所有、グレナダの議員、グレナダの為政者による奴隷の拷問を弾劾。

Betty Johnstone, 1728-1813: 両親と暮らす。家族の情報の発信元。

William (Johnstone) Pultney, 1729-1805: エディンバラで学ぶ、スミスの友人でサー・ジェイムズ・ステュアートを『国富論』でそれと明示せずに関与するまでに批判したとの有名なスミスの手紙の受け取り人。法曹で、家族で最も尊敬され、最も成功した。資産家の Frances Pultney と結婚、36年間議員を務めた。ドミニカ、グレナダ、トバゴ、フロリダ、ニューヨークに土地をもち、議会で奴隷貿易を支持。このように兄弟でも奴隷制への見解は180度違っている。

George Johnstone, 1730-87: 13歳で船乗り、海軍士官となって西インド諸島、リスボン、Cape Verde Islands、喜望峰へ、1764-66西部フロリダの新植民地の総督。議員として東インド会社問題、アメリカ問題に巻き込まれた。当初はアメリカ革命を支持、1778年にカーライル委員会の一員として和平交渉に派遣されたが、交渉に失敗、以後頑強な政府支持。この使節にはアダム・ファーガスンが随行したこともよく知られている。

Charlotte[Johnstone] Balmain, 1732-73: 30歳まで家にいる、その後、牧師の息子 James Balmain、税関と不似合いな結婚をした。

John Johnstone, 1734-95: 16歳で東インド会社に就職、カルカッタ、ダッカなどで収税吏・商人。15年インドに暮らし、ムーア語とベンガル語を習得。大財産を築く。兄弟姉妹の5人の支援を行なった。インドで Elizabeth Carolina Keene と結婚、オヴィディウス、ホメロスの訳者、二人はインド人の召使と共にスコットランドに帰り、短期間議員、奴隷制に反対。

Patrick Johnstone, 1737-56: 16歳で東インド会社に入る。会計士として働き、John と会社を始めたが、19歳で他界。

Gideon Johnstone, 1739-88: 海軍に入り、西インドへ、その後、自由な商人として東インドへ、東インド会社の役人となり、会社の軍に応募、ガンジスの水を売る、アメリカで革命戦争の時に海軍の士官など。リヴァプールの法律家で奴隷船所有者の娘 Fanny Colquitt と結婚。スコットランドで他界。

以上の兄弟姉妹の人生の多様性は、この時代のスコットランド人の人生の多様性を集約して表現しているかのようで、きわめて興味深い。

以下の文献目録には簡単な解説と書評情報をつけているものがあるが、網羅的なものではないことをお断りしなければならない。ランダムでも参考になるかもしれないという程度のものである。

Bibliography

1. スコットランド啓蒙

1. Alexander Dow and Shelia Dow eds., *A History of Economic Thought*, Routledge, 2006.
(John Law から19世紀までのスコットランド経済学の伝統)
2. Knud Haakonssen ed., *Enlightenment and Religion: Rational Dissent in Eighteenth-Century Britain*, Cambridge U. P., 2006.
3. Anne-Marie Kilday, *Women and Violent Crime in Enlightenment Scotland*, Royal Historical Society, 2007.
4. Jose R. Torre, *The Political Economy of Sentiment: Paper Credit and the Scottish Enlightenment in Early Republic Boston 1780-1820*, Pickering & Chatto, 2007.
【書評：伊藤誠一郎『経済学史研究』50-2, 2009】
5. Roger L. Emerson, *Academic Patronage in the Scottish Enlightenment: Glasgow, Edinburgh and St. Andrews Universities*, Edinburgh U.P., 2008.
【書評：田中秀夫『経済学史研究』51-1, 2009】
6. Colin G. Galloway, *White People, Indians, and Highlanders: Tribal People and Colonial Encounters in Scotland and America*, Oxford U.P., 2008.
7. Michael F. Graham, *The Blasphemies of Thomas Aikenhead: Boundaries of Belief on the Eve of the Enlightenment*, Edinburgh U.P., 2008.
8. Alexander Broadie, *A History of Scottish Philosophy*, Edinburgh U.P., 2009.
9. Cairns Craig, *Intending Scotland: Explorations in Scottish Culture Since the Enlightenment*, Edinburgh U.P., 2009.
10. David B. Wilson, *Seeking Nature's Logic: Natural Philosophy in the Scottish Enlightenment*, The Pennsylvania State U.P., 2009.
11. Mark R. and M. Towsey, *Reading the Scottish Enlightenment: Books and Their Readers in Provincial Scotland, 1750-1820*, Brill, 2010.
12. Pam Perkins, *Women Writers and the Edinburgh Enlightenment*, Brill-Rodopi, 2010.
13. Stana Nadic ed., *Scots in London in the Eighteenth Century*, Bucknell U.P., 2010.

(Interdisciplinary な研究, Diaspora の Hub としてのロンドン)

14. Andrew Hook and Clare Elliott eds., *Francis Jeffrey's American Journal: New York to Washington 1813*, Glasgow: Hamming Earth Press, 2011.
15. Thomas Arnert & S. Manning eds., *Character, Self, and Sociability in the Scottish Enlightenment*, Palgrave, 2011.
16. Richard J. Jones, *Tobias Smollett in the Enlightenment: Travels through France, Italy, and Scotland*, Bucknell U.P., 2011.
17. Jonathan M. Yeager, *Enlightened Evangelicism: The Life and Thought of John Erskine*, Oxford U.P., 2011.
18. Emma Rothchild, *The Inner Life of Empires: An Eighteenth-Century History*, Princeton U.P., 2011.
19. Katharine Glover, *Elite Women and Polite Society in Eighteenth-Century Scotland*, Boydell Press, 2011.
20. David Allan, *Making British Culture: English Readers and the Scottish Enlightenment*, Routledge, 2011.
21. Alexander Broadie, *Agreeable Connexions: Scottish Enlightenment Links with France*, John Donald. 2012. (特に Pierre-Daniel Huet と David Hume, Reid と Théodore Jouffroy, Smith と Sophie de Grouchy 「テロルの時代の癒し」, Montesquieu と Ferguson)
22. Kondo Ariyuki, *Robert and James Adam, Architects of the Enlightenment*, Pickering & Chatt, 2012.
23. K. A. Manley, *Books, Borrowers, and Shareholders: Scottish Circulating and Subscription Libraries before 1825: A Survey and Listing*, Edinburgh Bibliographical Society, 2012. (Millar, 労働者ライブラリのキャンペーン)
24. Stephen W. Brown and Warren McDougall eds., *The Edinburgh History of the Book in Scotland, Vol. 2: Enlightenment and Expansion 1707-1800*, Edinburgh U.P., 2012.
25. Esther Mijers, "News from the Republic of Letters": *Scottish Students, Charles Mackie and the United Provinces, 1650-1750*, Brill, 2012. (United Province におけるスコットランド人のネットワーク, チャールズ・マッキーを中心として)
26. Alasdair Raffe, *The Culture of Controversy: Religious Arguments in Scotland, 1660-1714*, The Boydell Press, 2012.
27. John Finlay, *The Community of the College of Justice: Edinburgh and the Court of Session, 1687-1808*, Edinburgh U.P., 2012.
28. J. Walter McGinty, *An Animated Son of Liberty: A Life of John Witherspoon*, Arena Books, 2012.
29. Robert G.W. Anderson and Jean Jones eds., *The Correspondence of Joseph Black*, 2 vols., Ashgate, 2012.

30. *History of European Ideas, Special Issue: Dugald Stewart: His Development in British and European Context*, Vol. 38, Number 1, March 2012.
31. Christopher Berry, *The Idea of Commercial Society in the Scottish Enlightenment*, Edinburgh U.P., 2013. (本書の主題は著者が長く追求してきたもので、いわばライフワークともいえるべきものである。1997年に『スコットランド啓蒙の社会理論』を出版した著者は、ここでは焦点を絞り、「商業社会の観念を体系的かつ網羅的に調べる」努力をしたと述べている。目次：1. スコットランド, 改良, 啓蒙。2. 商業, 諸段階, 社会の自然史。3. 繁栄と貧困。4. 市場, 法, 政治。5. 自由および商業の徳。6. 商業の危険。7. 商業社会の観念。ヒュームとスミスが中心, ファーガスン, ケイムズ, ミラー, W・ロバートスンがそれに続き, ハチスンとジェイムズ・ステュアートの扱いは軽い。そこに著者の独自性も示されている。邦訳が進行中)
32. Roger L. Emerson, *An Enlightened Duke: The Life of Archibald Campbell (1682-1761), Earl of Ilay, 3rd Duke of Argyll*, Kilkerran: Humming Earth, 2013.
33. Hugh M. Milne, *The Legal papers of James Boswell, Vol. 1. In Relation to Cases in which Boswell First Became Involved in the Period 29 July 1766 to 11 November 1767*, Edinburgh: The Stair Society, 2013.
34. Frederic Albritton Johnson, *Enlightenment's Frontier: The Scottish Highlands and the Origins of Environmentalism*, Yale U.P., 2013.
(第1部：Walker, Anderson の自然史, 第2部：スミスの経済学=長期的環境問題を無視, 第3部, Sinclair の自然史の再評価)
35. Norman S. Poser, *Lord Mansfield: Justice in the Age of Reason*, McGill-Queen's U.P., 2013.
36. Katie Barclay and Deborah Simonton eds., *Women in Eighteenth-Century Scotland: Intimate, Intellectual and Public Lives*, Ashgate, 2013.
37. Christina Petsoulas, *Hayek's Liberalism and Its Origins: His Idea of Spontaneous Order and the Scottish Enlightenment*, Routledge, 2013.
38. Brian Bonnyman, *The Third Duke of Buccleuch and Adam Smith: Estate Management and Improvement in Enlightenment Scotland*, Edinburgh U.P., 2013.
39. Silvia Sebastiani, *The Scottish Enlightenment: Race, Gender, and the Limits of Progress*, Palgrave, 2013.
40. Rosalind Carr, *Gender and Enlightenment Culture in Eighteenth-Century Scotland*, Edinburgh U.P., 2014.
41. J. David Hoeverler, *James McCosh and the Scottish Intellectual Tradition: from Glasgow to Princeton*, Princeton U. P., 2014.
42. Dennis C. Rasmussen, *The Pragmatic Enlightenment: Recovering the Liberalism of Hume, Smith, Montesquieu, and Voltaire*, Cambridge U. P., 2014.

II. スコットランド史

* 1 合邦

1. Karin Bowie, *Scottish Public Opinion and the Anglo-Scottish Union, 1699-1707*, Royal Historical Society, Boydell, 2007.

【書評：松園伸『イギリス哲学研究』31, 2008】

2. Allan I. Macinnes, *Union and Empire: The Making of the United Kingdom in 1707*, Cambridge U.P., 2007.
3. Jøgen Sevaldsen and Jens Rahbek Rasmussen eds., *The State of the Union: Scotland 1707-2007*, Angles On the English-Speaking World, Vol. 7, Museum Tusulanum Press, 2007.
4. Jeffrey Stephen, *Scottish Presbyterians and the Act of Union 1707*, Edinburgh U. P., 2007.
5. Christopher, A. Whatley, *The Scots and the Union*, Edinburgh U.P., 2007.

【書評：松園伸『イギリス哲学研究』31, 2008】

6. Philipp Robinson Rössner, *Scottish Trade in the Wake of Union (1700-1760): The Rise of a Warehouse Economy*, Franz Steiner Verlag, 2008.
7. T. M. Devine ed., *Scotland and the Union, 1707-2007*, Edinburgh U. P., 2008.
8. Stewart J. Brown and Christopher A. Whatley eds., *Union of 1707: New Dimensions*, The Scottish Historical Review Supplementary Issue, Edinburgh U.P., 2008.
9. Colin Kidd, *Union and Unionism: Political Thought in Scotland, 1500-2000*, Cambridge U.P., 2008. (500年間にわたる Unionism の本格的研究はなかったので、その欠落を埋めるべく行なわれた研究)

* 2 ジャコバイト

1. Geoffrey Plank, *Rebellion and Savagery: The Jacobite Rising of 1745 and the British Empire*, University of Pennsylvania Press, 2006.
2. Daniel Szechi, *1715: The Great Jacobite Rebellion*, Yale U. P., 2006.
3. Paul Monod, Murray Pittock and Daniel Szechi eds., *Loyalty and Identity: Jacobite Home and Abroad*, Palgrave, 2008.
4. Jonathan D. Oates, *The Jacobite Campaigns: The British State at War*, Bickering & Chatto, 2011.
5. Neil Guthrie, *The Material Culture of the Jacobites*, Cambridge U. P., 2013.
6. Murry Pittock, *Material Culture and Sedition, 1688-1766*, Palgrave MacMillan, 2013.
(Jacobite seditious material の分析)
7. Allan I. Macinnes and Douglas J. Hamilton eds., *Jacobitism, Enlightenment and Empire, 1680-1820*, Pickering & Chatto, 2014.

* 3 ハイランド

1. Stana Nenadic, *Lairds and Luxury: The Highland Gentry in Eighteenth-Century Scotland*, John Donald, 2007.
2. Martin Rackwits, *Travels to Terra Incognita: The Scottish Highlands and Hebrides in Early Modern Travellers' Account c. 1600-1800*, New York: Internationale Hochschulschriften, 2007. (400以上の旅行記の分析)
3. Margaret Connell Szasz, *Scottish Highlanders and Native Americans: Indigenous Education in the Eighteenth-Century Atlantic World*, University of Oklahoma Press, 2007.
4. Kenneth McNeil, *Scotland, Britain, Empire: Writing the Highlands, 1760-1860*, Ohio State University, 2007.

* 4 その他

1. Alexander Madox with Cowan & Finlay eds., *The Scottish Nation: Identity and History: Essays in Honour of William Ferguson*, John Donald, 2007.
2. Hugh Trevor-Roper, *The Invention of Scotland: Myth and History*, Yale U.P., 2008.
3. George K. McGilvary, *East India Patronage and the British State: The Scottish Elite and Politics in the Eighteenth Century*, Tauris Academic Studies, 2008.
4. David G. Barrie, *Police in the Age of Improvement: Police Development and the Civic Tradition in Scotland, 1775-1865*, Willan Publishing, 2008. (1章は Glasgow: Patrick Colquhoun, Adam Smith, John Millar を扱っている。18世紀スコットランドの Police とは共同体の規制と行政, あるいは貿易の統制, 商業立法, 経済政策を含む。1772年のペナントのグラスゴウ旅行→グラスゴウのポリスは3団体からなっている, 市会, マーチャント・ハウス, トレイド・ハウスの為政者)
5. Bob Harris, *The Scottish People and the French Revolution*, Pickering & Chatto, 2008.
6. Bruce P. Lenman, *Enlightenment and Change, Scotland 1746-1832*, Edinburgh U.P., revised, 2008.
7. Alexander Murdoch, *Scotland and America, c. 1600-c.1800*, Palgrave, 2010.
8. John M. Mackenzie and T.M. Devine, *Scotland and the British Empire*, Oxford U.P., 2011.
9. T.M. Devine, *To the Ends of the Earth: Scotland's Global Diaspora, 1750-2010*, Allen Lane, 2011. (世界に離散・活躍したスコットランド人の研究。Chap. 2. 西インド奴隷制とスコットランド人)
10. T.M. Devine and Jenny Wormald eds., *The Oxford Handbook of Modern Scottish History*, Oxford U.P., 2012.
11. T. M. Devine, *The Scottish Nation: A Modern History*, Penguin Books, 2012.
12. Angela McCarthy, *A Global Clan: Scottish Migrant Networks and Identities since the Eighteenth Century*, I.B.Tauris, 2012.

13. Peter Aitchison and Andrew Cassell, *The Lowland Clearances: Scotland's Silent Revolution, 1760-1830*, Edinburgh: Birlinn Limited, 2013.
14. Laurence A. B. Whitley, *A Great Grievance: Ecclesiastical Lay Patronage in Scotland until 1750*, Eugene, OR: Wipf & Stock, 2013.
15. Tanja Bueltmann, Andrew Hinson and Graeme Morton, *The Scottish Diaspora*, Edinburgh U.P., 2013. (1825から1938年の間に233万人が海外に出た：これまで十分な研究なし)
16. Victoria Henshaw, *Scotland and the British Army, 1700-1750: Defending the Union*, Bloomsbury, 2014.

III. ヒューム研究

1. Neil MacArthur, *David Hume's Political Theory: Law, Commerce, and the Constitution of Government*, University of Toronto Press, 2007.
【書評：犬塚元『経済学史研究』50-2, 2009】
2. Christopher J. Finlay, *Hume's Social Philosophy: Human Nature and Commercial Sociability in A Treatise of Human Nature*, London: Continuum Studies in British Philosophy, 2007.
3. Russell Hardin, *David Hume: Moral and Political Theorist*, Oxford U.P., 2007.
4. Carl Wennerlind and Margaret Schabas eds., *David Hume's Political Economy*, Routledge, 2008.
【書評：壽里竜『経済学史研究』50-2, 2009】
5. Paul Russell, *The Riddle of Hume's Treatise : Skepticism, Naturalism, and Irreligion*, Oxford U.P., 2008.
6. Elizabeth S. Radcliffe ed., *A Companion to Hume*, Wiley-Blackwell, 2008.
7. Roger L. Emerson, *Essays on David Hume, Medical Men and the Scottish Enlightenment: 'Industry, Knowledge and Humanity'*, Ashgate, 2009.
8. John P. Wright, *Hume's A Treatise of Human Nature: An Introduction*, Cambridge U.P., 2009.
9. Jeffrey A. Bell, *Deleuze's Hume: Philosophy, Culture, and the Scottish Enlightenment*, Edinburgh, U. P., 2009.
10. Russell Hardin, *David Hume: Moral and Political Theorist*, Oxford U. P., 2009.
11. Robert Zaretsky and John T. Scott, *The Philosophers' Quarrel: Rousseau, Hume, and the Limits of Human Understanding*, Yale U.P., 2009.
12. Willie Henderson, *The Origins of David Hume's Economics*, Routledge, 2010.
【書評：壽里竜『経済学史研究』54-1, 2012】
13. Annette C. Baier, *The Pursuits of Philosophy: An Introduction to the Life and Thought of David Hume*, Harvard U. P., 2011.

14. Ilya Kasavin ed., *David Hume and Contemporary Philosophy*, Cambridge Scholars Publishing, 2012.
15. Andrew Sable, *Hume's Politics: Coordination and Crisis in the History of England*, Princeton U.P., 2012.
16. Ken Mackinnon, ed., *Hume and Law*, Ashgate, 2012. (1959から2005の既刊27論文)
17. Mikko Tolonen, *Mandeville and Hume: Anatomy of Civil Society*, Oxford: SVEC, 2013.
18. Mark G. Spencer ed., *David Hume: Historical Thinker, Historical Writer*, Pennsylvania U.P., 2013.
19. Felix Waldmann, *Further Letters of David Hume*, Edinburgh: Edinburgh Bibliographical Society, 2014. (A young lady, Cochrane or Coss Stewart への手紙。1763年10月6日, Francesco Algarotti への手紙→ I am tone deaf)
20. Michael B. Gill, *Humean Moral Pluralism*, Oxford U.P., 2014.

IV. スミス研究

1. Stephen J. McKenna, *Adam Smith: The Rhetoric of Propriety*, Southern Illinois U. P., 2006.
2. Leonidas Montes and Eric Schliesser eds., *New Voices on Adam Smith*, Routledge, 2006.
3. Knud Haakonssen ed., *The Cambridge Companion to Adam Smith*, Cambridge U.P., 2006.
【書評：篠原久『イギリス哲学研究』30, 2007】
4. Iain McLean, *Adam Smith: Radical and Egalitarian; An Interpretation for the 21st Century*, Edinburgh U.P., 2006.
【書評：渡辺恵一『イギリス哲学研究』32, 2009】
5. Duncan K. Foley, *Adam's Fallacy: A Guide to Economic Theology*, Belknap Press, 2006. (亀岬澄夫・佐藤滋正・中川栄治訳『アダム・スミスの誤謬—経済神学への手引き』ナカニシヤ出版, 2011年)
6. James Buchan, *Authentic Adam Smith: His Life and Ideas*, W. W. Norton & Co. Inc., 2006. (山岡洋一訳『真説アダム・スミス—その生涯と思想をたどる』日経PB社, 2009年)
7. Geoff Cockfield, Ann Firth and John Laurent eds., *New Perspectives on Adam Smith's The Theory of Moral Sentiments*, Edward Elgar, 2007.
8. Doğan Göçmen, *The Adam Smith Problem: Reconciling Human Nature and Society in The Theory of Moral Sentiments and Wealth of Nations*, Tauris Academic Studies, 2007.
9. D. D. Raphael, *The Impartial Spectator: Adam Smith's Moral Philosophy*, Oxford U. P., 2007. (生越利昭・松本哲人訳『アダム・スミスの道徳哲学—公平な観察者』昭和堂, 2009年)
10. Gavin Kennedy, *Adam Smith: A Moral Philosopher and His Political Economy*, Palgrave Macmillan, 2008. (小谷野俊夫訳『アダム・スミス』一灯社, 2014年)

11. Dennis C. Rasmussen, *The Problem and Promise of Commercial Society: Adam Smith's Response to Rousseau*, Pennsylvania State U.P., 2008.
【書評：柘植尚則『イギリス哲学研究』34, 2011】
12. Tony Aspromourgos, *The Science of Wealth: Adam Smith and the Framing of Political Economy*, Routledge, 2009.
13. Murray Milgate & Shannon C. Stimson eds., *After Adam Smith: A Century of Transformation in Politics and Political Economy*, Princeton U.P., 2009.
14. J.T. Young ed., *Elgar Companion to Adam Smith*, Elgar, 2009.
15. Ryan Patrick Hanley, *Adam Smith and the Character of Virtue*, Cambridge U.P., 2009.
【書評：生越利昭『イギリス哲学研究』34, 2011】
16. Nicholas Phillipson, *Adam Smith: An Enlightend Life*, Allen Lane & Yale U.P., 2010. (永井大輔訳『アダム・スミスとその時代』白水社, 2014年)
【書評：篠原久『日本18世紀学会年報』26, 2011；渡辺恵一『イギリス哲学研究』35, 2012;】
17. Fonna Forman-Barzilai, *Adam Smith and the Circles of Sympathy: Cosmopolitanism and Moral Theory*, Cambridge U.P., 2010.
18. Vivienne Brown and Samuel Freischacker eds., *The Philosophy of Adam Smith: Essays Commemorating the 250th Anniversary of The Theory of Moral Sentiments (Adam Smith Review, Vol. 5)*, Routledge, 2010.
19. Spencer J. Pack, *Aristotle, Adam Smith and Karl Marx: On Some Fundamental Issues in the 21st Century Political Economy*, Edward Elgar, 2010.
20. Jan Horst Keppler, *Adam Smith and the Economy of the Passions*, Routledge, 2010.
21. Ian Simpson Ross, *The Life of Adam Smith*, Second Edition, Oxford U.P., 2010.
【書評：篠原久『経済学史研究』53-2, 2012】
22. Paul Oslington, *Adam Smith as Theologian*, Routledge, 2011.
23. James R. Otteson, *Adam Smith*, Continuum, 2011 (reprint Bloomsbury, 2013) .
24. Donald Rutherford, *In the Shadow of Adam Smith: Founders of Scottish Economics 1700-1900*, Palgrave, 2012. (スミス研究にとどまらぬスコットランド経済学史)
【書評：中川栄治『経済学史研究』56-1, 2014】
25. Jens Pertersen, *Adam Smith als Rechtstheoretiker*, De Gruyter, 2012.
26. Berry, Paganelli, and Smith eds., *The Oxford Handbook of Adam Smith*, OUP, 2013.
27. Jack Russell Weinstein, *Adam Smith's Pluralism: Rationality, Education and the Moral Sentiments*, Yale U.P., 2013. (反マンデヴィルの TMS とマンデヴィルに依拠した WN によってスミスはカント以上に liberal pluralism に基礎を与えた)
28. Lisa Herzog, *Inventing the Market: Smith, Hegel, and Political Theory*, Oxford U.P., 2013.

スミス研究に関連する研究展望

1. 大島幸治・佐藤有史「海外アダム・スミス研究の動向——人文諸科学におけるその興隆と「アダム・スミス問題」の復活を中心にして」, 『経済学史研究』52-1, 2010年。
2. 渡辺恵一「アダム・スミス研究の動向——過去10年における内外の『国富論』研究を中心に」, 『経済学史研究』53-1, 2011年。
3. 大島幸治「最近の欧米のスミス研究から」, 『経済学史研究』56-2, 2015年。

V. ファーガスン研究

1. Lisa Hill, *The Passionate Society: The Social, Political and Moral Thought of Adam Ferguson*, Springer, 2006.
2. Eugene Heath and Vincenzo Merolle eds., *Adam Ferguson: History, Progress and Human Nature*, Pickering & Chatto, 2008.
3. Eugene Heath and Vincenzo Merolle eds., *Adam Ferguson: Philosophy, Politics and Society*, Pickering & Chatto, 2009.
4. Iain McDaniel, *Adam Ferguson in the Scottish Enlightenment: The Roman Past and Europe's Future*, Cambridge: Harvard U.P., 2013. [Warlike philosopher の側面の研究]
5. Matthew B. Arbo, *Political Vanity: Adam Ferguson on the Moral Tensions of Early Capitalism*, Fortress Press, 2014.
6. Yasuo Amoh, Darren Lingley, and Hiroko Aoki eds., *Adam Ferguson and the American Revolution*, Kyokuto Shoten, 2015.

VI. リード研究

1. William C. Davis, *Thomas Reid's Ethics: Moral Epistemology on Legal Foundations*, Continuum, 2006.
2. Knud Haakonssen ed., *Thomas Reid on Practical Ethics* (The Edinburgh Edition of Thomas Reid), Edinburgh U. P., 2007.
3. Alexander Broadie and Paul Wood eds., *Thomas Reid and the University* (The Edinburgh Edition of Thomas Reid), Edinburgh U. P., 2008.
4. Knud Haakonssen and James A. Harris eds., *Essays on the Active Powers of Man on Practical Ethics* (The Edinburgh Edition of Thomas Reid), Edinburgh U. P., 2010.

(以上田中秀夫)

(冒頭に記したように、リスト A の作成でも協力を得たが、以下は渡辺恵一氏によるわが国

の研究の展望とリストである。）

B わが国の研究—1980年代から現在まで—

1. わが国のスコットランド啓蒙研究の特徴

わが国のスコットランド啓蒙研究は、1980年代になって本格的に始まったが、その研究が本格化する契機となったのは、2冊の論文集 Campbell and Skinner (1982) と Hont and Ignatieff (1983) の刊行である。1985年にはさらに、Sher, R. B., *Church and University in the Scottish Enlightenment: The Moderate Literati of Edinburgh*, Edinburgh U. P. と Robertson, J., *Scottish Enlightenment and the Militia Issue*, John Donald という刺激的な内容の2冊の単著が現れ、1980年代中葉以降、わが国でも「スコットランド啓蒙（思想）」をタイトルとする書物や学術論文が陸続と出版されるに至る。それとともに Hont and Ignatieff (1983) に先行して出版されていた、Winch, D., *Adam Smith's Politics: An Essay in Historiographic Revision*, Cambridge U. P., 1978 と Haakonssen, K., *The Science of A Legislator: The Natural Jurisprudence of David Hume and Adam Smith*, Cambridge U. P., 1981の2冊も、スコットランド啓蒙思想の文脈の中で再読されることになる。その結果、わが国では次のような論点に主要な関心が寄せられて研究が進められてきた。

- (1) スコットランド啓蒙思想における近代自然法学と共和主義（J・G・A・ポーコックが提起した二つのケンブリッジ・パラダイム問題）
- (2) スコットランド啓蒙思想における「経済学の成立」問題
- (3) グラスゴウ大学における「道徳哲学」の伝統：カーマイクル→ハチスン→（ヒューム）→スミス

もっとも、わが国のスコットランド啓蒙研究が1980年代になって定着するに至った背景には、60年代に着手された水田 洋、山崎 怜、大野精三郎による「スコットランド歴史学派」研究の蓄積があったことを指摘しておかなければならない⁵⁾。また、より広範な視野に立った佐々木 武の「『スコットランド学派』における『文明社会』論の構成—'natural history of civil society'の一考察（1-4）」（『国家学会雑誌』85,7-8,9-10,11-12, 86,1-2, 1972-73年）の画期的な業績も忘れてはならない論考である。

下記の文献リストは、ギャンベル＝スキナー編『スコットランド啓蒙の起源と性質』（1982）以降2014年までの邦語文献を中心にピックアップしている。田中氏のサーヴェイの方針にしたがって、便宜上2005年でPart I と II とにわけている。厳密に言えば、スコットランド啓蒙の文脈において研究されたものではない文献もかなりあるが、この時代とそれに属する思想家を対象とした邦語文献であれば、翻訳書も含めてできるかぎり網羅した⁶⁾。

Part I: 1982-2005

Campbell, R. H. and A. S. Skinner eds. (1982), *The Origins and Nature of the Scottish Enlightenment*, John Donald.

【渡辺恵一（研究ノート）『京都学園大学論集』12-2, 1983】

Hont, I. and M. Ignatieff eds. (1983), *Wealth and Virtue: The shaping of Political Economy in the Scottish Enlightenment*, Cambridge U. P., 1983. (水田洋・杉山忠平監訳『富と徳—スコットランド啓蒙における経済学の形成』未来社, 1991)

【渡辺恵一（研究ノート）『京都学園大学論集』14-2, 15-1, 1985-86】（なお、渡辺恵一（1986）「経済学の成立—スコットランド啓蒙とスミス」, 竹本 洋編『経済学の古典的世界』(昭和堂) は、上記2点の成果を教科書風にアレンジしたもの)

F. ハチスン (1983) 『美と徳の観念の起源』(山田英彦訳: 玉川大学出版部)

神野慧一郎 (1984) 『ヒューム研究』(ミネルヴァ書房)

R. H. キャンベル & A. S. スキナー (1984) 『アダム・スミス伝』(久保芳和訳, 東洋経済新報社)
[Campbell, R. H. and A. S. Skinner, Adam Smith, Croom Helm, 1982]

D. ステュアート (1984) 『アダム・スミスの生涯と著作』(福鎌忠恕訳, 御茶の水書房)

北 政巳 (1985) 『近代スコットランド経済社会史研究』(同文館)

舟橋善恵 (1985) 『ヒュームと人間科学』(勁草書房)

渡部俊明 (1985) 『ヒューム社会哲学の構造』(新評論)

D. ヒューム (1985) 『奇蹟論・迷信論・自殺論』(福鎌忠恕・斎藤繁雄訳, 法政大学出版局)

Chuo University Library (1986), *David Hume and The Eighteenth Century British Thought: An annotated catalogue*, The Centennial Publication of Chuo University.

板橋重夫 (1986) 『イギリス道徳感覚学派—成立史序説』(北樹出版)

【書評: 星野彰男『社会思想史研究』11, 1987】

篠原 久 (1986) 『アダム・スミスと常識哲学—スコットランド啓蒙思想の研究』(有斐閣)

(なお「スコットランド啓蒙 (思想)」がタイトル (ただしサブタイトル) として用いられた本邦初めてのモノグラフ。18世紀スコットランドの思想史的背景を明らかにしたうえで、スミスの論理学・認識論・実践道徳論からケイムズおよびリードの常識哲学までを視野に入れた研究)

【書評: 星野彰男『社会思想史研究』11, 1987】

D. D. ラファエル (1986) 『アダム・スミスの哲学思考』(久保芳和訳, 雄松堂出版) [Raphael, D. D., *Adam Smith*, Oxford U. P., 1985.]

斎藤繁雄・田中敏弘・杖下隆英編 (1987) 『デイヴィッド・ヒューム研究』(御茶の水書房)

【書評: 田中秀夫『社会思想史研究』12, 1988】

W. ファルガスン (1987) 『近代スコットランドの成立—十八-二十世紀スコットランド政治社会史』(飯島啓二訳: 未来社) [Ferguson, W., *Scotland: 1689 to the Present*, Mercat Press,

1968.]

Chuo University Library (1988), *David Hume and The Eighteenth Century British Thought: An annotated catalogue Supplement*, The Centennial Publication of Chuo University.

泉谷周三郎 (1988) 『ヒューム』 (清水書院)

井上和雄 (1988) 『資本主義と人間らしさ — アダム・スミスの場合』 (日本経済評論社)

桂木隆夫 (1988) 『自由と懐疑 — ヒューム法哲学の構造とその生成』 (木鐸社)

小林昇 (1988) 『小林昇経済学史著作集 X — J・ステュアート新研究』 (未来社)

社会思想史学会編 (1988) 「シンポジウム:十八世紀啓蒙の動態 — スコットランド啓蒙をめぐって」 『社会思想史研究』 (12)

田中正司 (1988) 『アダム・スミスの自然法学 — スコットランド啓蒙と経済学の生誕』 (御茶の水書房) [第2版2003] (『スミスの『法学講義』(Aノート)を, ハチスン道德哲学体系の批判的継承関係において分析)

【書評: 田中秀夫『日本18世紀学会年報』4, 1989】

田中正司編著 (1988) 『スコットランド啓蒙思想史研究 — スミス経済学の視界』 (北樹出版) (『スコットランド啓蒙 (思想)』がタイトルに登場した本邦初めての論文集。シャフツベリ, マンドヴィル, フレッチャー, ヒューム, J. ステュアート, カーマクル, ハチスン, ケイムズ卿, スミス, D. ステュアート, ベンサム等を扱う)

【書評: 永井義雄『社会思想史研究』13, 1989】

田中敏弘編著 (1989) 『スコットランド啓蒙と経済学の形成』 (日本経済評論社) (『P. リンズィ, ハチスン, ヒューム, J. ステュアート, ファーガスン, ミラー, J. アンダスン, D. ステュアートからなる論文集])

【書評: 川久保晃志『経済学論究』44-1, 1990; 渡辺恵一『京都学園大学論集』19-1, 1990】

D. ウィンチ (1989) 『アダム・スミスの政治学 — 歴史方法論的改訂の試み』 (永井義雄・近藤加代子訳, ミネルヴァ書房) [原書前掲1978]

飯塚正朝 (1990) 『『国富論』と18世紀スコットランド経済社会』 (九州大学出版会)

田添京二 (1990) 『サー・ジェイムズ・ステュアートの経済学』 (八朔社)

羽鳥卓也 (1990) 『『国富論』研究』 (未来社)

D. ヒューム (1990) 『人間知性の研究・情念論』 (渡辺俊明訳: 哲書房)

戒能通厚・角田猛之・平松紘編訳 (1990) 『ステアー・ソサエティ編 スコットランド法史』 (名古屋大学出版会) [The Stair Society, vol.20, *An Introduction to Scottish Legal History*, Part I, Edinburgh, 1958.]

田中秀夫 (1991) 『スコットランド啓蒙思想史研究 — 文明社会と国制』 (名古屋大学出版会) (『スコットランド啓蒙 (思想)』をメイン・タイトルとする本邦初めての単著。フレッチャー, ハチスン, ケイムズ, ヒューム, ダルリンプルを中心に「合邦」(啓蒙の成立) から「アメリカ問題」までを論じる)

- 【書評：渡辺恵一『経済論叢』147-1/2/3, 1991；水田洋『経済評論』1992.6；篠原久『イギリス哲学研究』15, 1992；坂本達哉『社会思想史研究』16, 1992】
- 高田紘二 (1991) 『18世紀スコットランドの制度と思想—スコットランド啓蒙と大学・クラブ・ソサエティそしてアダム・スミス』(時潮社)
- 野沢敏治 (1991) 『社会形成と諸国民の富—スミス経済学研究』(岩波書店)
- 【書評：田中秀夫『日本18世紀学会年報』7, 1994；鈴木信雄『社会思想史研究』16, 1992】
- I. ホント & M. イグナティエフ (1991) 『富と徳—スコットランド啓蒙における経済学の形成』(水田洋・杉山忠平監訳, 未来社) [原書前掲1983]
- Hiroshi Mizuta and Chuhei Sugiyama eds. (1992), *Adam Smith: International Perspectives*, Macmillan.
- 小林照夫 (1992) 『スコットランドの産業革命—エディンバラ経済圏を中心に』(八千代出版)
- 田中敏弘 (1992) 『ヒュームとスコットランド啓蒙—18世紀イギリス思想史研究』(晃洋書房)
- 鈴木信雄 (1992) 『アダム・スミスの知識=社会哲学—感情の理論を視軸にして』(名古屋大学出版会)
- A. スミス (1992) 『アダム・スミス芸術論』(馬淵貞治訳, 日本経済評論社)
- G. R. モロウ (1992) 『アダム・スミスにおける倫理と経済』(鈴木信雄・市岡義章訳：未来社) [Morrow, G. R., *The Ethical and Economic Theories of Adam Smith*, Longmans Green & Company, 1923, Kelly's Reprint, 1969.]
- 天羽康夫 (1993) 『ファーガスンとスコットランド啓蒙』(勁草書房) (本邦最初の包括的なファーガスン研究書)
- 【書評：田中秀夫『高知論叢』51, 1994】
- 田中正司 (1993) 『アダム・スミスの自然神学—啓蒙の社会科学の形成母体』(御茶の水書房)
- 【書評：篠原久『経済学史学会年報』32, 1994】
- J. ステュアート (1993) 『経済の原理—第3・第4・第5篇』(小林昇監訳・竹本洋他訳, 名古屋大学出版会)
- A. スミス (1993) 『アダム・スミス哲学論文集』(水田洋他訳, 名古屋大学出版会)
- D. ヒューム (1993) 『道徳原理の研究』(渡辺俊明訳：哲書房)
- J. G. A. ポーコック (1993) 『徳・商業・歴史』(田中秀夫訳, みすず書房) [Pocock, J. G. A., *Virtue, Commerce, and History*, Cambridge U. P., 1985.]
- A. J. エア (1994) 『ヒューム』(篠原久訳, 日本経済評論社) [Ayer, A. J., *Hume*, Oxford U. P., 1980.]
- 小林昇 (1994) 『最初の経済学体系』(名古屋大学出版会)
- 新村聡 (1994) 『経済学の成立—アダム・スミスと近代自然法学』(御茶の水書房)
- 【書評：篠原久『イギリス哲学研究』19, 1996】

- 関源太郎 (1994) 『「経済社会」形成の経済思想 — 18世紀スコットランド「経済改良」思想の研究』 (ミネルヴァ書房)
 【書評: 田中秀夫 『経済研究』 47-3, 1996】
- 杖下隆英 (1994) 『ヒューム』 (勁草書房)
- 星野彰男 (1994) 『市場社会の体系 — ヒュームとスミス』 (新評論)
 【書評: 篠原久 『経済学史学会年報』 33, 1995】
- 山崎 怜 (1994) 『経済学と人間学 — アダム・スミスとともに』 (昭和堂)
- スミス (1994) 『哲学・技術・想像力 — 哲学論文集』 (佐々木健記, 勁草書房)
- 板橋重夫 (1995) 『『人間の科学』と宗教 — デイヴィッド・ヒューム研究』 (東京法令出版)
- 坂本達哉 (1995) 『ヒュームの文明社会 — 勤労・知識・自由』 (創文社)
 【書評: 水田洋 『社会思想史研究』 20, 1996; 田中秀夫 『三田学会雑誌』 90-3, 1997; 桂木隆夫 『イギリス哲学研究』 20, 1997】
- 竹本 洋 (1995) 『経済学体系の創成 — ジェイムズ・ステュアート研究』 (名古屋大学出版会)
- 田添京二 (1995) 『欧州経済学史の群像』 (白桃書房) (第2章「ステュアートとスミス」および第3章「スコットランド史をめぐって」)
- 只腰親和 (1995) 『『天文学史』とアダム・スミスの道徳哲学』 (多賀出版)
 【書評: 篠原久 『イギリス哲学研究』 19, 1996】
- D. ヒューム (1995) 『人間本性論』 ([第1巻] 木曾好能訳, 法政大学出版会)
- 山崎 怜 (1995) 『『安価な政府』の基本構成』 (信山社)
- Amoh, Y. ed. (1996), *Adam Ferguson: Collection of Essays*, Rinsen Book Co.
- 泉谷周三郎 (1996) 『ヒューム』 (研究社出版)
- 井上治子 (1996) 『想像力 — ヒュームへの誘い』 (三一書房)
- 大森郁夫 (1996) 『ステュアートとスミス — 「巧妙な手」と「見えざる手」の経済理論』 (ミネルヴァ書房)
- 神野慧一郎 (1996) 『モラル・サイエンスの形成 — ヒューム哲学の基本構造』 (名古屋大学出版会)
- 田中秀夫 (1996) 『文明社会と公共精神 — スコットランド啓蒙の地層』 (昭和堂)
- 中谷武雄 (1996) 『スミス経済学の国家と財政』 (ナカニシヤ出版)
 【書評: 渡辺恵一 『経済学史学会年報』 35, 1997】
- 永山了平 (1996) 『社会契約説と人類学 — ジョン・ロックからジョン・ミラーへ』 (木鐸社)
 【書評: 田中秀夫 『イギリス哲学研究』 25, 1998】
- K. ラックス (1996) 『アダム・スミスの失敗』 (田中秀臣訳, 草思社) [Kenneth, L., *Adam Smith's Mistake: How a Moral Philosopher Invented Economics and Ended Morality*, Shambhala Press, 1990.]
- 遠藤和朗 (1997) 『ヒュームとスミス — 道徳哲学と経済学』 (多賀出版)

- 古賀勝次郎 (1997) 『ヒューム体系の哲学的基礎 — デイヴィッド・ヒューム研究 (1)』 (行人社)
- 斎藤繁雄 (1997) 『ヒューム哲学と「神」の概念』 (法政大学出版局)
- 田中正司 (1997) 『アダム・スミスの倫理学 上・下』 (御茶の水書房)
- 角田猛之 (1997) 『法文化の諸相 — スコットランドと日本の法文化』 (晃洋書房)
- 越智良二 (1998) 『アダム・スミスの貨幣論の研究』 (青葉図書)
- 北政巳 (1998) 『近代スコットランド移民史研究』 (御茶の水書房)
- J. スチュアート (1998) 『経済の原理 — 第1・第2篇』 (小林昇監訳・竹本洋他訳, 名古屋大学出版会)
- 関 劭 (1998) 『スコットランド経済とアダム・スミス』 (ナカニシヤ出版)
- 田中秀夫 (1998) 『共和主義と啓蒙 — 思想史の視野から』 (ミネルヴァ書房)
- 【書評: 小田川大典 『イギリス哲学研究』 23, 2000】
- R. ミチソン編 (1998) 『スコットランド史 — その意義と可能性』 (富田理恵・家入葉子訳, 未来社) [Mitchison, R. ed., *Why Scottish History Matters*, 2nd ed., The Saltire Society, 1997.]
- マイケル・イグナティエフ (1999) 『ニーズ・オブ・ストレンジャーズ』 (添谷育志・金田耕一訳, 風行社) [Ignatieff, M., *The Needs of Strangers*, Chatto and windus, 1984]
- 榎並洋介 (1999) 『アダム・スミス管見 — 経済学の古典研究』 (近代文芸社)
- 古賀勝次郎 (1999) 『ヒューム社会科学の基礎 — デイヴィッド・ヒューム研究 (2)』 (行人社)
- 小林照夫 (1999) 『スコットランドの首都圏形成史 — 都市と交通の文化史論』 (第2版, 盛山堂書店 [初版1996])
- 小柳公洋 (1999) 『スコットランド啓蒙研究 — 経済学的考察』 (九州大学出版会) (☞第1部「道徳哲学」(ハチスン, ヒューム), 第2部「歴史論」(ケイムズ, ファーガスン, ロバートスン, ミラー))
- 【書評: 田中秀夫 『経済学史学会年報』 38, 2000】
- 佐伯啓思 (1999) 『アダム・スミスの誤算 — 幻想のグローバル資本主義 (上)』 (PHP 新書) [中公文庫2014]
- 田中秀夫 (1999) 『啓蒙と改革 — ジョン・ミラー研究』 (名古屋大学出版会) (☞本邦初のミラー研究の単著であり, ミラーの草稿を分析している。)
- 【書評: 星野彰男 『イギリス哲学研究』 21, 2001; 佐々木武 『経済学論集』 67-4, 2002】
- V. M. ホープ (1999) 『ハチスン, ヒューム, スミスの道徳哲学 — 合意による徳』 (奥谷浩一・内田司訳, 創風社) [Hope, V. M., *Virtue by Consensus: The Moral Philosophy of Hutcheson, Hume, and Adam Smith*, Oxford U. P., 1989.]
- 永井義雄 (2000) 『自由と調和を求めて — ベンサム時代の政治・経済思想』 (ミネルヴァ書房)
- 水田 洋 (2000) 『思想の国際転位 — 比較思想史的研究』 (名古屋大学出版会)
- 【書評: 田中秀夫 『イギリス哲学研究』 25, 2002】
- 山崎 怜 (2000) 『経済学体系と国家認識 — アダム・スミスの一研究』 (岡山商科大学学術研究

叢書2)

伊藤 哲 (2000) 『アダム・スミスの自由経済倫理観 — セルフ・コマンドと自然的自由』 (八千代出版)

【書評：篠原久『イギリス哲学研究』24, 2001】

A. スミス (2000-01) 『国富論』 (水田洋監訳・杉山忠平訳 [全4冊], 岩波文庫)

I. S. ロス (2000) 『アダム・スミス伝』 (篠原久・只腰親和・松原慶子訳, シュプリンガー・フェアラーク東京) [Ross, I. S., *The Life of Adam Smith*, Oxford U. P., 1995.]

長尾伸一 (2001) 『ニュートン主義とスコットランド啓蒙 — 不完全な機械の喩』 (名古屋大学出版会)

【書評：篠原久『日本18世紀学会年報』17, 2002】

K. ホーコンセン (2001) 『立法者の科学—デイヴィッド・ヒュームとアダム・スミスの自然法学』 (永井義雄・鈴木信雄・市岡義章訳, ミネルヴァ書房) [原著前掲1981]

田中秀夫 (2002) 『社会の学問の革新 — 自然法思想から社会科学へ』 (ナカニシヤ出版)

田中秀夫 (2002) 『原点探訪 アダム・スミスの足跡』 (法律文化社)

星野彰男 (2002) 『アダム・スミスの経済思想 — 付加価値論と「見えざる手」』 (関東学院大学出版会)

【書評：渡辺恵一『京都学園大学経済論部論集』12-3, 2003】

Sakamoto, T. and H. Tanaka eds. (2003), *The Rise of Political Economy in the Scottish Enlightenment*, Routledge.

【書評：N. Phillipson『経済学史学会年報』46, 2004; I. McLean, *The Adam Smith Review*, 3, IASS, 2007】

稲村 勲 (2003) 『『国富論』体系再考 — 商業社会の政治経済学体系』 (御茶の水書房)

【書評：渡辺恵一『札幌学院評論』27, 2004】

田島慶吾 (2003) 『アダム・スミスの制度主義経済学』 (ミネルヴァ書房)

【書評：渡辺恵一『経済学史学会年報』45, 2004】

北 政巳 (2003) 『スコットランド・ルネッサンスと大英帝国の繁栄』 (藤原書店)

スミス (2003) 『道徳感情論』 (水田洋訳 [上・下], 岩波文庫)

田中正司 (2003) 『経済学の生誕と『法学講義』—アダム・スミスの行政原理論研究』 (御茶の水書房)

【書評：伊藤誠一郎『イギリス哲学研究』28, 2005】

柘植尚則 (2003) 『良心の興亡—近代イギリス道徳哲学研究』 (ナカニシヤ出版)

【書評：渡辺恵一『社会思想史研究』28, 2004】

犬塚 元 (2004) 『デイヴィッド・ヒュームの政治学』 (東京大学出版会)

【書評：田中秀夫『社会思想史研究』30, 2006】

長尾伸一 (2004) 『トマス・リード—実在論・幾何学・ユートピア』 (名古屋大学出版会)

【書評：篠原久『イギリス哲学研究』28, 2005】

T. リード (2004) 『心の哲学』 (朝広謙次郎訳, 知泉書館)

A. スミス (2004) 『アダム・スミス 修辞学・文学講義』 (水田洋・松原慶子訳, 名古屋大学出版会)

久米 暁 (2005) 『ヒュームの懐疑論』 (岩波書店)

コリーニ／ウィンチ／バロウ著 (2005) 『かの高貴なる政治の科学 — 19世紀知性史研究』 (永井義雄・坂本達哉・井上義朗訳, ミネルヴァ書房) [Collini, S., Winch, D. and J. Burrow, *That Noble Science of Politics: A study in nineteenth century intellectual history*, Cambridge U. P., 1983.] (『スコットランド啓蒙を19世紀イギリス政治・経済思想へと繋ぐ試み』)

【書評：只越親和『イギリス哲学研究』30, 2007; 研究ノート：中澤信彦『関西大学経済論集』56-1, 2006】

竹本 洋 (2005) 『『国富論』を読む—ヴィジョンと現実』 (名古屋大学出版会)

【書評：安藤隆穂『社会思想史研究』30, 2006】

中才敏郎編 (2005) 『ヒューム読本』 (法政大学出版局)

山崎 怜 (2005) 『アダム・スミス』 (研究社)

【書評：篠原久『イギリス哲学研究』29, 2006】

A. スミス (2005) 『法学講義』 (水田洋訳, 岩波文庫)

Part II: 2006-2014

木村正俊・中尾政史編 (2006) 『スコットランド文化事典』 (原書房)

田中秀夫・山脇直司編 (2006) 『共和主義の思想空間 — シヴィック・ヒューマニズムの可能性』 (名古屋大学出版会)

【書評：添谷育志『図書新聞』2794, 2006; 篠原久『経済学史研究』49-2, 2007; 佐藤光『関西大学経済論集』56-4, 2007】

S. ジョンソン (2006) 『スコットランド西方諸島の旅』 (諏訪部仁他訳, 中央大学出版部)

佐伯啓思・松原隆一郎編著 (2007) 『共和主義ルネサンス — 現代西洋思想の変貌』 (NTT出版)

A. スミス (2007) 『国富論 — 国の豊かさの本質と原因についての研究 (上・下)』 (山岡洋一訳: 日本経済新聞社)

W. L. テーラー (2007) 『ハチスン・ヒューム・スミス — 経済学の源流』 (山口正春・川又祐訳, 三恵社) [Taylor, W. L., *Francis Hutcheson and David Hume as Predecessors of Adam Smith*, Duke U. P., 1965.]

渡辺邦博 (2007) 『ジェイムズ・ステュアートとスコットランド — もう一つの古典派経済学』 (ミネルヴァ書房)

【書評：菊池壮蔵『経済学史研究』50-2, 2009; 伊藤誠一郎『社会思想史研究』33, 2009】

- 江藤秀一 (2008) 『十八世紀スコットランドー ドクター・ジョンソンの旅行記を巡って』 (開拓社)
- 大島幸治 (2008) 『アダム・スミスの道徳哲学と言語論』 (御茶の水書房)
 【書評: 星野彰男 『社会思想史研究』 33, 2009; 篠原久 『経済学史研究』 52-1, 2010】
- 田中秀夫編著 (2008) 『啓蒙のエピステーメーと経済学の生誕』 (京都大学出版会)
 【書評: 坂本達哉 『イギリス哲学研究』 33, 2010; 村松茂美 『経済学史研究』 52-1, 2010】
- 堂目卓生 (2008) 『アダム・スミスー 『道徳感情論』 と 『国富論』』 (中公新書)
- 日本カレドニア学会編 (2008) 『スコットランドの歴史と文化』 (明石書房)
- J. G. A. ポーコック (2008) 『マキアヴェリアン・モーメント』 (田中秀夫・奥田敬・森岡邦泰 訳, 名古屋大学出版会) [Pocock, J. G. A., *The Machiavellian Moment: Florentine Political Thought and the Atlantic Republican Tradition*, Second paperback ed., Princeton U. P., 2003.]
 【書評: 渡辺恵一 『週刊東洋経済』 2008/3/8; 犬塚元 『論座』 2008.8; 土井美德 『社会思想史研究』 33, 2009; 小林麻衣子 『イギリス哲学研究』 33, 2010; 小田川大典 『政治思想学会会報』 28, 2009; 同 『法制史研究』 59, 2010】
- 鈴木 亮 (2009) 『『国富論』 とイギリス急進主義』 (日本経済評論社) (堀浜林正夫・飯塚正朝 編の遺稿集。イギリス急進主義者としてジョン・ミラーに言及がある)
- Q. スキナー (2009) 『近代政治思想の基礎ー ルネッサンス, 宗教改革の時代』 (門間都喜郎訳, 春風社) [Skinner, Q., *The Foundations of Modern Political Thought*, 2vols., Cambridge U. P., 1978.]
- 田中正司 (2009) 『増補版・アダム・スミスと現代ー 市場経済の本来のあり方を学ぶ』 (御茶の水書房)
- 柘植尚則 (2009) 『イギリスのモラリストたち』 (研究社)
- F. ハチスン (2009) 『道徳哲学序説』 (田中秀夫・津田耕一訳, 京都大学学術出版会)
 【書評: 篠原久 『経済学史研究』 52-2, 2011; 島内明文 『イギリス哲学研究』 34, 2011】
- I. ホント (2009) 『貿易の嫉妬ー 国際競争と国民国家の歴史的展望』 (田中秀夫監訳, 昭和堂)
 [Hont, I., *Jealousy of Trade: International Competition and the Nation-State in Historical Perspective*, Belknap Press of Harvard U.P., 2005.]
 【書評: 片山杜秀 『読売新聞』 2009.6.28】
- 水田洋 (2009) 『アダム・スミス論集ー 国際的研究状況のなかで』 (ミネルヴァ書房)
 【書評: 只越親和 『経済学史研究』 52-2, 2011; 坂本達哉 『社会思想史研究』 34, 2010; 篠原久 『イギリス哲学研究』 34, 2011】
- 青木裕子 (2010) 『ファーガソンの国家と市民社会』 (勁草書房)
 【書評: 篠原久 『社会思想史研究』 36, 2012; 古家豊 『経済学史研究』 54-1, 2012; 福田名津子 『イギリス哲学研究』 35, 2012】

- 北 政巳 (2010) 『スコットランド人ディアスポラと大英帝国 — 技術伝播と近代世界・日本』 (摇篮社)
- T. C. スマウト (2010) 『スコットランド国民の歴史』 (木村正俊監訳, 原書房) [Smout, T. C., *A History of the Scottish People 1560-1830*, Fontana Press, 1998.]
- 中川栄治 (2010) 『「アダム・スミス価値尺度論」欧米文献の分析—基本的諸問題を巡って (上)』 (晃洋書房)
- D. ヒューム (2010) 『政治論集』 (田中秀夫訳, 京都大学学術出版会)
【書評: 星野彰男 『社会思想史研究』 36, 2012; 坂本達哉 『イギリス哲学研究』 35, 2012】
- 星野彰男 (2010) 『アダム・スミスの経済理論』 (関東学院大学出版会)
【書評: 渡辺恵一 『社会思想史研究』 36, 2012; 新村聡 『経済学史研究』 53-2, 2012】
- 森 直人 (2010) 『ヒュームにおける正義と統治—文明社会の両義性』 (創文社)
【書評: 犬塚元 『社会思想史研究』 35, 2011; 壽里竜 『イギリス哲学研究』 35, 2012】
- 山口正春 (2010a) 『アダム・スミスの思想像』 (三恵社)
- 山口正春 (2010b) 『アダム・スミスとその周辺—思想・経済・社会』 (三恵社)
- 小林照夫 (2011) 『近代スコットランドの社会と風土—〈スコティッシュネス〉と〈ブリティッシュネス〉の間』 (春風社)
- 佐々木武・田中秀夫編 (2011) 『啓蒙と社会—文明観の変容』 (京都大学学術出版会)
【書評: 森岡邦泰 『イギリス哲学研究』 35, 2012】
- 坂本達哉 (2011) 『ヒューム 希望の懐疑主義』 (慶應義塾出版会)
【書評: 田中秀夫 『社会思想史研究』 36, 2012; 犬塚元 『政治思想研究』 13, 2013; 森直人 『経済学史研究』 54-2, 2013】
- 『思想』(2011) 「デイヴィッド・ヒューム生誕300年」(岩波書店) 12号
- D. ヒューム (2011) 『人間知性研究—付・人間本性論摘要』 (斎藤繁雄・一ノ瀬正樹訳, 法政大学出版局)
- D. ヒューム (2011) 『道徳・政治・文学論集』 (田中敏弘訳, 名古屋大学出版会)
【書評: 星野彰男 『社会思想史研究』 36, 2012; 坂本達哉 『イギリス哲学研究』 35, 2012】
- D. フォーブズ (2011) 『ヒュームの哲学的政治学』 (田中秀夫監訳, 昭和堂) [Forbes, D., *Hume's Philosophical Politics*, Cambridge U. P., 1975.]
【書評: 佐々木武 『社会思想史研究』 36, 2012】
- ダンカン・K. フォーリー (2011) 『アダム・スミスの誤謬—経済神学への手引き』 (亀岬澄夫・佐藤滋正・中川栄治訳, ナカニシヤ出版) [Duncan K. Foley, *Adam's Fallacy: A Guide to Economic Theology*, Belknap Press, 2006.]
- 丸山 徹 (2011) 『アダム・スミス『国富論』を読む』 (岩波書店)

【書評：星野彰男『経済学史研究』56-2, 2015】

大森郁夫 (2012) 『文明社会の貨幣—貨幣数量説が生まれるまで』 (知泉書館)

A. スミス (2012) 『アダム・スミス 法学講義1762~1763』 (水田・篠原・只越・前田訳, 名古屋大学出版会)

【書評：渡辺恵一『経済学史研究』55-1, 2013;野原慎司『社会思想史研究』37, 2013】

田中秀夫 (2012) 『アメリカ啓蒙の群像—スコットランド啓蒙の影の下で1723-1801』, (名古屋大学出版会)

【書評：加藤洋子『週刊読書人』2012. 4.20;石川敬史『社会思想史研究』37, 2013】

袴田康裕 (2012) 『信仰告白と教会—スコットランド教会史におけるウェストミンスター信仰告白』 (新教出版社)

服部昭郎 (2012) 『古都エディンバラ崎人伝—ジョン・ケイが描いたスコットランド啓蒙時代』 (昭和堂)

A. ハーマン (2012) 『近代を創ったスコットランド人—啓蒙思想のグローバルな展開』 (篠原久監訳, 守田道夫訳, 昭和堂) [Herman, A., *The Scottish Enlightenment: The Scots' Invention of the Modern World*, Haper Perennial, 2001.]

林直樹 (2012) 『デフォーとイングランド啓蒙』 (京都大学学術出版会)

D. ヒューム (2011-12) 『人間本性論』 ([第2巻・第3巻]伊勢俊彦・石川徹・中釜浩一訳, 法政大学出版会)

吉田憲夫 (2012) 『旅行家トマス・ペナント—スコットランド旅行記』 (晃学出版)

矢嶋直規 (2012) 『ヒュームの一般的観点—人間に固有の自然と道徳』 (勁草書房)

スミス (2013) 『道徳感情論』 (高哲男訳, 講談社学術文庫)

田中正司 (2013) 『アダム・スミスの認識論管見』 (社会評論社)

【書評：星野彰男『経済学史研究』56-1, 2014, 只越親和『イギリス哲学研究』37, 2014】

田中秀夫 (2013a) 『近代社会とは何か』 (京都大学学術出版会)

【書評：壽里竜『経済学史研究』56-2, 2015】

田中秀夫 (2013b) 『啓蒙の射程と思想家の旅』 (未来社)

【書評：壽里竜『経済学史研究』56-2, 2015】

野原慎司 (2013) 『アダム・スミスの近代性の根源』 (京都大学学術出版会)

【書評：渡辺恵一『社会思想史研究』38, 2014;水田洋『経済学史研究』56-1, 2014】

松村茂美 (2013) 『プリテン問題とヨーロッパ連邦—フレッチャーと初期啓蒙』 (京都大学出版会) (『イアンドルー・フレッチャーに関する本邦初めての研究書。イングランド共和主義の亜流とみなすフレッチャー論を乗り越える解釈を提起している)

【書評：伊藤誠一郎『経済学史研究』56-1, 2014, 森直人『イギリス哲学研究』37, 2014】

佐藤一進 (2014) 『保守のアポリアを超えて—共和主義の精神とその変奏』(NTT出版)

A. スミス (2014) 『道徳感情論』(村井章子訳, 日経PB社クラシックス)

田中秀夫 (2014) 『スコットランド啓蒙とは何か』(ミネルヴァ書房) (☞ 第三代アーガイル公爵, カーマイケル, ハチスン, ターンブル, ヒューム, スミス, ファーガスン, リード, ミラー論を収録)

田中秀夫編 (2014) 『野蛮と啓蒙—経済思想史からの接近』(京都大学学術出版会)

N. フィリップソン (2014) 『アダム・スミスとその時代』(永井大輔訳, 白水社) [Nicholas Phillipson, *Adam Smith: An Enlightend Life*, Allen Lane, 2010.]

2. わが国におけるスコットランド啓蒙研究の今後の課題

海外で「啓蒙の多様性と多元性」を開拓する研究が飛躍的な進展を見せるなか, 上記(1)~(3)を基軸に据えてきたわが国のスコットランド啓蒙研究はひとつの転機に直面していると言えるのではなかろうか。すでに新しい方向性を示す先駆的な研究も出ているが, これまでの問題点を整理しながら, さらに視野を広げてスコットランド啓蒙思想を再考する必要がある。

(a) イングランド啓蒙(ブリテン啓蒙)との関係: Porter, R., *Enlightenment: Britain and the Creation of the Modern World*, Allen Lane, London, 2000; do., *The Creation of the Modern World: The Untold Story of the British Enlightenment*, W. W. Norton & Co Inc., New York, 2000. デフォーの研究である林(2013)も「イングランド啓蒙」という視点を打ち出しているが, ポーターに対してスコットランド啓蒙の独自性を強調するのは, Herman, A. (2001), *The Scottish Enlightenment: The Scots' Invention of the Modern World*, Haper Perennial (篠原監訳・守田訳『近代を創ったスコットランド人』前掲)

(b) スコットランド啓蒙を前後に拓く

① フレッチャーの国制論: 松村(2013)

② 19世紀イギリス社会経済思想への継承: Collini, Winch and Burrow (1983), Fontana, B (1985), *Rethinking the politics of commercial society: The Edinburgh Review 1802-1832*, Cambridge U. P., 永井(2000), Milgate and Stimson (2009)

(c) フランス啓蒙との交流: Dawson, D and P. Morère eds. (2004), *Scotland and France in Enlightenmellt*, Bucknell U.P., Broadie (2012); Rasmussen (2008:2014); 野原(2013) etc.

(d) アメリカ啓蒙への影響: Sher, R. B. and J. R. Smitten ads. (1990), *Scotland and America in the Age of Enlightenment*, Bucknell U. P.; Torre (2007), Murdoch (2010), 田中(2012),

(e) 啓蒙と経済学の関係

① ナポリ啓蒙: Robertson, J. (2005), *The Case for The Enlightenment: Scotland and Naples 1680-1760*, Cambridge U. P.

② フランス啓蒙と政治経済学

- ・ムロンのポリス論：米田昇平『欲求と秩序—18世紀フランス経済学の展開』（昭和堂，2005），田中編（2014）所収の米田論文・野原論文
 - ・フランス政治経済学の差異（ケネー，チュルゴーとコンドルセ，ネッケル）：安藤裕介『商業・専制・世論——フランス啓蒙の「政治経済学」と統治原理の転換』創文社，2014)
- ③ スミスの経済学はどういう学問として成立したのか。さらに言えば，そもそもスコットランド啓蒙の文脈において経済学の成立を論証できたかどうか？

わが国では若手研究者の関心が，フランス啓蒙や19世紀イギリスへと移り，かつてあれほど隆盛を極めたスコットランド啓蒙研究やスミス研究においては後継者不足が問題となっている。

(渡辺恵一)

注

- 1) Roy Porter, *The Creation of the Modern World: The Untold Story of the British Enlightenment*, W.W.Norton & Co Inc, 2000.
- 2) Istvan Hont and Michael Ignatieff eds., *The Wealth and Virtue: the Formation of the Political Economy in the Scottish Enlightenment*, Cambridge U.P., 1983. 水田洋・杉山忠平監訳『富と徳—スコットランド啓蒙における経済学の形成』，未来社，1999年。
- 3) Roger Emerson, *Professors, Patronage and Politics: The Aberdeen Universities in the Eighteenth Century*, Aberdeen, 1991., Do., *Academic Patronage in the Scottish Enlightenment: Glasgow, Edinburgh and St Andrews Universities*, Edinburgh University Press, 2008. Do., *An Enlightened Duke: The Life of Archibald Campbell (1682-1761), Earl of Ilay, 3rd Duke of Argyll*, Humming Earth, 2013. アイレイに仕えたアンドルー・フレッチャー，ミルトン卿（愛国者の甥）の研究はまだない。
- 4) この大著の最終巻である第6巻は2015年（近日中）に刊行される模様である。
- 5) 水田『アダム・スミス研究』（未来社，1968）の補論1（「アダム・スミス時代の思想」）として収録された論考と，山崎が60年代に二つの紀要に発表した「18世紀スコットランドの歴史家たち（Ⅰ）（Ⅱ）—忘れられた歴史主義」（『香川大学経済論叢』33-4・6，1960-61）や「初期スミスにおけるスコットランド—アダム・スミスとスコットランド歴史学派・序説」（『香川大学経済学部研究年報』6，1966）・「スコットランド歴史学派とその著作について」（同9,1969）など，スミス，ヒュームおよびミラーを中心とする一連の研究を参照。また大野には，『歴史家ヒュームとその社会哲学』（[一橋経済研究叢書29] 岩波書店，1977）に集約されたヒューム研究のほか，スミス，ミラー，ファーガスンに関する論考がある。
- 6) 『小林昇経済学史著作集』（全11巻，未来社，1976-89）と『内田義彦著作集』（全10巻，岩波書店，1988-89）は，スコットランド啓蒙とは別の文脈で論じられるべき業績なので，小林のJ・ステュアート研究を除き，文献リストから除外している。

